

1960年代ソ連の新聞における読者投稿の編集と若者言説の広がり ——『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙のモラルに関する記事から——

後藤 智

1. 本稿の趣旨

1950～60年代のソ連には、自由で楽観的な雰囲気があったとされる。国の人口は、都市部住民の増加等、1955年に戦前の水準まで回復し、国民の賃金・生活水準が向上した。¹ 第20回党大会(1956. 2.)の個人崇拜批判、第21回党大会(1959. 2.)の社会主義の世界史的勝利宣言等、政治において大きな動きがあり、また、文化界では、「60年代人」(шестидесятники)と呼ばれる人々が登場するなど、ユートピア的な空気が生まれた。²

1950～60年代、ソ連において、都市化の進展、ホワイト・カラーの増大、余暇の増加等、いわゆる大衆社会現象が始まった。『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙(Комсомольская Правда)に社会面、『イズベスチヤ紙』(Известия)に家庭欄が設けられるなど、市民は自分を取り巻く環境に関心を持ち、新聞等に投稿し、また、掲載される市民の手紙に注意を払った。³

第20回党大会において、国家運営への大衆参加が謳われ、自由主義的な民主主義に対置し、社会的・経済的平等の達成を重視する「ソヴィエト民主主義」が示された。国家の一部の権限が社会団体や労働組合に移譲されるなど、政策形成の過程に広範な市民が参加するようになった。⁴

第22回党大会(1961. 10.)で採択された「ソ連共産党第三党綱領」(Третья программа КПСС、以下、「党綱領」という)は、約20年後にソ連の社会主義が共産主義に移行するとし、共産主義実現に必要な経済発展や生活水準向上に関する目標を掲げるとともに、ソ連市民に育まれるべき高い道徳的原則、いわゆる「共産主義モラル」に言及した。共産主義モラルの訓育は、とりわけ若年層に対する取組みの重要性が強調され、また、当該モラルは、職場、学校、社会等の生活から学ぶこととされたことから、『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙は、一般の若者の日常生活に関する記事を多数掲載した。労働者や学生は、職場や学校での問題を自分の視点で語った。

本稿では、1960年代を、ソ連の若者の考えや言葉が、より自由化・多様化した時期としてとらえた

¹ ジュゼッペ・ボッファ／坂井信義、大久保昭男訳『ソ連邦史』(第4巻)大月書店、1980年、235-240頁。

² 松戸清裕『ソ連史』ちくま新書、2011年、131-132頁。小説、詩、音楽、絵画、演劇、映画、物理学等多岐にわたる分野で新しい才能が注目を集めた。

³ アレクセイ・アジュベイ(Алексей Иванович Алжубей, 1924-1993)が『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙、『イズベスチヤ』紙の編集長を務めていたとき、読者の意見が掲載される欄を設けた(辻村明『大衆社会と社会主義社会』東京大学出版会、1973年、82-83頁)。

⁴ 河本和子「利益の同質性の中の齟齬—スターリン後のソヴィエト民主主義理念」、松戸清裕、浅岡善治、池田嘉郎、宇山智彦、中嶋毅、松井康浩編『ロシア革命とソ連の世紀3 冷戦と平和共存』岩波書店、2017年、113-128-129頁／松戸清裕『ソ連という実験—国家が管理する民主主義は可能か』筑摩書房、2017年、第1章「ソヴェト政権と民意—一党制民主主義」、31-108頁参照。

上で、まず、若者の言葉や考え方の背景にあった、当時のソ連社会の公式のモラルを、党綱領に基づき理解する(第2章)。それを踏まえ、若い読者の日常生活の中のモラルに関する疑問及びその応答が多数掲載される新聞記事の抜粋から、投書の内容、編集局における投書の編集の方法を検討する(第3章～第4章)。編集局における投書の編集プラン、方針を分析することにより(第5章)、記事の中に現れる若者言説の自由化、多様化のプロセス等を考察する(第6章)。

対象とする新聞は、高い組織率を誇ったコムソモール⁵の全国機関紙『コムソモリスカヤ・プラウダ』とする。コムソモールは、14～28歳を対象とし、ソ連共産党と協力関係にある、独立した社会団体である。全連邦コムソモール中央委員会は、共和国、州、市等の下部組織を持ち、学校や職場等のコムソモールを統轄する。多数の読者を有し、また、傘下の地方組織等で発行される印刷物の目安・基準となるという点でも、同紙に掲載される言葉や考え方は影響力があったと考えられる。

2. 1960年代のソ連の公式のモラル

党綱領は、経済の実績を踏まえ、実現を期して作成された。⁶ 共産主義到来の実現性等を疑問視する意見もあったが、⁷ 暮らしの豊かさが強調されたことで、党綱領は、当時のソ連の人々に影響を与えたと考えられる。⁸ 党綱領に関連して、当時の若者のモラルの特徴として、「モラルと経済発展の緊密な結びつき」、「自由・個の尊重の広がり」の2点を把握する。

2.1. モラルと経済発展の緊密な結びつき

党綱領は、社会主義の世界的波及等、社会主義が新しい段階に入りつつあるという認識の下、

⁵ 全連邦レーニン共産主義青年同盟(ВЛКСМ: Всесоюзный Ленинский Коммунистический Союз Молодежи)。ヴァルフォロメーエヴァ(Галина Ивановна Варфоломеева, 1945-)は著書で、コムソモール入団は全く自由だが、進学時等「頼りになる保証」だったと述べる(Варфоломеева Г. И. Моя советская школа 50-е годы 20 века. Москва: Типография Россельхозакадемии, 2009. С. 347-348)。ヴァルフォロメーエヴァはウラン・ウデ市出身、航空無線技術者として勤務、退職後モスクワに移り、2004～2015年に本著を含むソ連時代の回想録を4冊出版している。なお、本稿において、邦訳が出版されている文献以外からの引用は拙訳である。

⁶ ソ連共産党、最初の党綱領(1903年第2回党大会採択)は、ボリシェヴィキ党が、ツァーリの専制政治、ブルジョワ体制の打倒、プロレタリア独裁の確立を、第二党綱領(1919年第8回党大会採択)は、社会主義体制の建設や、レーニンの社会主義建設計画の実現を最重要課題としたもので、両綱領の主要課題は達成されたとしている(第三党綱領序文)。なお、本稿では、党綱領は、Программа Коммунистической Партии Советского Союза (Принята съездом КПСС)。Москва: Издательство «Правда», 1961を使用する。

⁷ ヴァルフォロメーエヴァは、「人々の反応は同じでなかった。嘲笑したり、悪態をついたりする者がいた。パパ[警察署長]は怒って新聞を投げつけた。他方、共産主義建設を「積極的に支持」する層がいた」と回想する(Варфоломеева. Там же. С. 373-374)。なお、本稿において[]は筆者による補足を示す。

⁸ ヴァイリ(Петр Львович Вайль, 1949-2009)とゲニス(Александр Александрович Генис, 1953-)は著書の中で、ノスタルジーとユーモアをもって、共産主義社会建設のユートピアは、党綱領案が『プラウダ紙』(Правда)、『イズベスチヤ紙』等で公表された1961年7月30日に始まったと言う(Вайль П. Л., Генис А. А. 60-е: Мир советского человека. Москва: Новое литературное обозрение, 1988. С. 12-18)。ヴァイリとゲニス、ラトビア共和国出身の文芸評論家、1977年に米国に移住。共著多数。

政治、経済、文化等において、資本主義に対する社会主義の優位性がいよいよ実証されるとし、電力供給の増、生産工程の総合的な機械化、オートメーション化⁹等の重点取り組み事項を示すなど、直近 10 年間(1961～70)の目標として、最大の資本主義国である米国の一人当たり生産量を追い抜くという目標を掲げた。農業では、最新の機械技術の導入、食糧供給増とともに、都市と農村の経済、社会、文化的格差をなくすことを最重要課題とした。¹⁰

労働生産性の向上は、労働者の所得の引上げ、生活物資の充実、住宅事情の改善、労働時間の短縮、余暇活用の活性化、文化・芸術の水準向上等につながる。党は、ソ連が直近 10 年で原則一日 6 時間労働又は週 35 時間労働に移行し、世界で最も労働時間が短く、有給休暇が多い、時間当たりの給与が最も高い国になるとした。併せて、子育て、高齢者等医療、福祉(様々なサービスの無料化を含む)にも言及し、ソ連が世界の模範となると宣言した。

これに併せて、共産主義社会の市民の資質である「共産主義モラル」の訓育の重要性を強調した。党綱領が党員だけではなく、全国民のモラルのあり方を示したことは、共産主義の理論、いわば「共産主義社会＝社会主義社会＋経済発展・強固な物質的技術的基盤の建設＋高い労働生産性＋高い市民意識(自覚)、モラル」という考え方による。¹¹ モラルは、大きく、良心的に労働すること、及び、国民の共有財産を、節度を持って適切に利用することの 2 つから成り、十月革命から 40 年以上を経て、人々が社会や家庭で正しいモラルをある程度実践しているとの認識に基づいている。

経済発展達成に向け広範な国民層の同意を得るため、ゆるぎない、誰もクレームをつけられないモラルを提示しなければならない。したがって、行動規範のリストは、地域性、時間性により限定されたものではなく、一般的、普遍的な倫理観になる。¹² 党綱領は、共産主義モラルとして「共産主義建設者のモラル・コーデクス」(Моральный кодекс строителя коммунизма、以下、「モラル・コー

⁹ 当時、オートメーションは、省力化による労働者の失業や配転等の点で、社会主義国の方が資本主義国よりも有利だと考えられ、ソ連もオートメーションを、社会主義的労働から共産主義的労働へ発展する際の物質的基礎の一つと見ていた(S. リリー／鎮目恭夫訳『オートメーションと社会の発展』みすず書房、1957 年、「未来への道」、122-143 頁／W. G. ヴァーチェット／内山敏訳『60 年代のソ連(下) 宇宙時代と共産主義』岩波書店、1962 年、「労働時間は減り、賃金と生産は上がる」、65-86 頁／同前、「オートメーションと人類」、87-118 頁参照)。

¹⁰ Программа Коммунистической Партии Советского Союза. С. 85.

¹¹ 社会主義は、生産手段が社会的所有であるものの、資本主義から生まれたばかりの共産主義社会である。絶えず進歩する科学と技術に基づき高い労働生産性が実現され、共産主義の物質的技術的基盤の建設により、精神労働と肉体労働、都市と農村の差異がなくなる。労働時間短縮等により、人々の文化的水準が引き上げられ、人間は全面的発達を遂げる(伊藤光晴編『岩波現代経済学事典』岩波書店、2004 年、489-490 頁(共産主義の項)参照)等。労働者が高度に組織された社会では、一人ひとりが労働に対する愛と規律、社会の利益への忠誠という資質を持つことが必要不可欠になる(宮川実『マルクス経済学辞典』青木書店、1971 年、52 頁(共産主義の項)参照)。

¹² チャールズ・テイラー／上野成利訳『近代 想像された社会の系譜』岩波書店、2011 年、46-48 頁参照。テイラーは、また、「道徳秩序とはつねに完全な実現にいたる途上にあると考えられているのであって、それゆえ根拠のないたんなる理念というわけではない。ただしそのような実現の瞬間はいまだ到来してはいない」とし、モラルは、「めざすべき方向をわれわれに示してくれる[……]いつの日か条件が整えば実現されるかもしれない」ものと述べる(同前、6-7 頁参照)。なお、同書は西欧米国の近代史についてのもので、ロシア、ソビエトは念頭に置かれていない。

デクス」という)において、「働かざる者食うべからず」、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」等、12 項目のスローガンを示した。¹³ その内容は社会主義圏に限らない、一般的な性格であり、共産主義モラルのイデオロギー性は、当該モラルが、生産手段が公共化され、階級がないとされる経済・社会条件下でのみ真に実現されるということである。¹⁴ 党綱領も、共産主義モラルの内容を「長い歴史の中で社会の抑圧・悪徳と闘った人民大衆に鍛えられた、基礎的な全人類的道徳規範(основные общечеловеческие моральные нормы)」としている。¹⁵

2.2. 自由・個人の尊重の広がり

「個人の尊厳は社会によって守られる。均等で自由な職業選択が一人ひとりに保証される。物的生産に係る時間が削減されると、個人において生産、科学、技術、文学、芸術における能力・才能を発達させる可能性が高まる」¹⁶ と党綱領が述べたように、「自由」には大きく2つの局面がある。

第一は、職業選択の自由である。1940年代後半～50年代前半、国民の間に改革を求める願望が高まったものの、経済復興等の理由で、改革への願望が封じ込められた。¹⁷ 1956年「賃金所得者及び給与所得者の企業及び公共機関からの許可なき辞職並びに妥当な理由なき欠勤に対する裁判義務廃止に関する法律」発令(不法離職を禁じる規定の廃止)は、自由への大きな転機となる。

1960年代、生産への科学の導入が重視され、これに併せて、高等教育が拡充された。労働者はより高い専門性を修得し、労働に活かすことが奨励された。中等学校修了後、いったん就職した者にも働きながら学ぶ機会が広がり、自由意思に基づく職業選択、転職が一層可能となった。¹⁸

第二は、自由時間の増大である。「生産性向上―労働時間の短縮・自由時間増大―個人生活の重視、個人の全面的発達」という道筋が示された。

生産性の向上は、労働者における高い組織性、すなわち、義務、規律、秩序が前提となる。モラルの公式解説書である、党中央委員会『モラル・コーデクスの手引き』¹⁹ 及びコムソモール中央委員会

¹³ Программа Коммунистической Партии Советского Союза. С. 119-120.

¹⁴ 機械化、オートメーションは、ソ連でこそ実現されるという考えがあったこと(註9参照)を踏まえると、当時は、労働時間の短縮、社会保障の充実も含め、イデオロギー性の一部だったと言うこともできる。

¹⁵ Программа Коммунистической Партии Советского Союза. С. 119.

¹⁶ Программа Коммунистической Партии Советского Союза. С. 121.

¹⁷ ボッフア／坂井、大久保訳『ソ連邦史』(第4巻)、第6篇第5章「ジダーノフと民族主義の高まり」、51-69頁参照。

¹⁸ 革命直後は労働選択の自由が広範囲に認められていたが、1930年、許可なく職場を離れることが禁じられ、企業体は許可なく離職した者の雇用を禁じられた。1931年労働手帳制導入後、企業体の長は労働者の解雇理由を手帳に明記することとされ、また、手帳の提示なしに雇用してはならなかった(トニー・クリフ／対馬忠行訳『現代ソ連論』風媒社、1968年、10-12・252-254頁)。なお、同法の発令により、とりわけ青年労働者(18～25歳)の転職が多く、また、ロシア共和国国内だけで100万人以上が離職、転職したというデータがある。(寺谷弘一『ソビエトの若者たち』社会学的調査から見る意識と行動』学陽書房、1978年、第5章「若者たちと労働」、86-98頁参照)

¹⁹ Моральный кодекс строителя коммунизма: Пособие для пропагандистов и слушателей системы политического просвещения. / Под ред. А. С. Вишнякова и М. Г. Журавкова. Москва: Издательство политической литературы ЦК КПСС (Политиздат: ИПЛ), 1964.

『共産主義モラル論説集』²⁰（以下、『論説集』という）は、個と集団、自由と義務の関係を論理的に説明しようとする。

集団における個の欲求については、生産手段が社会的所有とされた社会において、社会と個人の利益は対立しないことから、個人は、個の欲求の一時的な満足よりも社会的利益の方が重要であると考え、自覚的に個の利益を社会的利益に従属させる（сознательное подчинение личных интересов общественным）と説明している。²¹ また、併せて、マルクス＝レーニン主義は、個人が社会に埋没すること（растворение человека в обществе）や、人間を一つの機械の＜歯車＞に変えること（превращение его в «винтик» единого механизма）等、個の抑制（подавление личности）を否定するとし、²² 個の創造性が重視されることを強調している。

集団主義（коллективизм）とは、個人が世界を作り直す労働者の大きな隊列の一員であると感じ、また、自分や身近な人々のためだけでなく、社会全体のために働き生活することである。個人の目的、利害が社会のそれと原則的に一致する中で、個人は、集団においてこそ、はじめてあらゆる方面に発達する可能性を持ち、自覚的な自己規律（сознательная самодисциплина）を得ることで人間は自由になるとするのである。²³

義務とは、仕事の良心的に仕事を遂行すること、社会の運営に参加することである。義務は人間の居場所を確保し、人間を成長させ、また、社会の豊かさ、公共の福祉、安全秩序なくして、自由は成り立たないとする。個人が社会の利益と矛盾した行動を取るとき、自由は崩壊するとし、²⁴ 自由は義務の遂行と不可分であることを繰り返し説明している。

戦後生まれの若者たちが労働の現場に現れ、²⁵ 1960年代は、ソ連最高会議代議員中、約20%が30歳未満、地区ソビエト代議員の約25%は30歳未満（以上1966年5月19日『プラウダ』紙）、建設関係労働者の60.8%、教師、医師、技師の2人に1人は30歳未満（以上『今日のソ連邦』²⁶ 1969年

²⁰ Коммунистическая Нравственность: Сборник статей в помощи пропагандистам и слушателям комсомольских политкружков «моральный кодекс строителя коммунизма». / Сост. Д. Авраамов. Москва: издательство ЦК ВЛКСМ. «Молодая гвардия», 1963.

²¹ Моральный кодекс строителя коммунизма С.24-25. この考えは、マルクスの「類的存在」、すなわち、真に解放された人間は、私人と公民の分裂を克服した人間であるという考えに基づくものと考えられる。公共の福祉に対する配慮が自己利益の追求より優先される考えは、米国独立戦争や仏革命により生まれた近代市民社会の基礎とされる（内田樹、石川康宏『若者よ、マルクスを読もうII 蘇るマルクス』かもがわ出版、2014年、119-122頁参照）。

²² Коммунистическая Нравственность. С. 29.

²³ Коммунистическая Нравственность. С. 119-138. (Ф. Щербак «Когда рядом локоть товарища»)参照。マカレンコ（Anton Семенович Макаренко, 1888-1939）の集団主義が踏襲されている。

²⁴ Коммунистическая Нравственность. С. 98-118. (Н. Мокроусов «Твой долг перед обществом»)参照。

²⁵ 当時、ソ連では、小学校は、9月1日時点で7歳（9月生まれは6歳も可）の児童が入学する（1年生の間に8歳となる）。義務教育（8年生）卒業時は15歳で、高等教育進学希望者等は9年生（中等普通教育学校は2年制、ただし、1958～63年は3年制）に進み、10（11）年生を17（18）歳で修了する。

²⁶ 駐日ソ連邦大使館広報部発行の日本語広報誌（1958年～1991年）。

3月15日号)となった。²⁷ ソ連社会において、スターリン治世の時代を知らず、²⁸ また、新しい時代を築こうとする意識が強い若者たち²⁹ の思考や言葉が影響力を持ち始めた。

1960年代、最も発達した社会主義国ソ連にとって、資本主義国との経済競争に敗北することは許されない。高いレベルの技能とモラルを持つ集団の力なしで、先進諸国との経済競争に勝つことはできない。スターリン期のような強制が不可能な時代、個の尊重と自由が所与である世代が経済競争に勝つために、国は、社会の利益や義務を理解し経済発展を達成する集団の力と、自由や個の尊重に向かう力、この2つの力を調和させなければならない。自由や個の尊重を前提として、労働、社会活動参加等の「義務」をいかに達成するかが、当時のモラルにおいて重要な課題だったのであり、このため、党は手引きを、コムソモールは、論説集や機関紙を通じ、必要な情報の発信に取り組んだのである。

3. 『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙における共産主義モラルに係る読者投稿

『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙(以下、『コムソモール』紙という)は、1925年創刊、発行部数約1千万部(1978)の日刊紙で、一日の標準的な紙面はA2判4頁、内容は、党・コムソモールの活動のほか、海外の出来事、スポーツ、小説、映画・文学評論等多岐にわたる。

機関紙の主たる目的は、党や国、コムソモールの事業や見解を大衆に広めるとともに、労働における先駆的な取組み、模範的実践に係る情報を提供することである。また、市民が多様な意見を出し、議論を活性化させ、主体的に社会の運営に参加することは、ソビエト民主主義の理念に合致し、国家と人々の協働につながると考えられたことから、³⁰ 若者の相談や一般市民からの意見等を掲載し、読者にはたらきかける役割も有していた。

本章、次章において、1960年代の記事から、日常生活に関する読者からの投書に対し、多数の読者が応答しテーマを深める記事を3つ選び内容を把握する。いずれも編集局が受理した応答が千通を超え、編集局は数回にわたり投書を紹介した後、討論を総括する記事を掲載した。

本章では、回を追うごとにテーマが発展し、各回において多様な意見が出され、編集局が討論を

²⁷ 寺谷『社会学的調査からみる意識と行動 ソビエトの若者たち』、1頁。

²⁸ 参考として、1945年生のヴァルフォロメーエヴァは、スターリン死亡のニュースに両親が神妙な様子だったこと、上級生が参列した追悼集会に報道取材が来たことを回想するものの、自分の感想を書いていない(Варфоломеева. Там же. С. 97-99)。

²⁹ 奥田東(元京都大学総長、1905-1999)は、京大紛争の背景として、「戦争を経験し、戦後の復興を見てきた旧世代は『あの頃に比べればよくなった』と考えがちだ。[……]これに対して、戦後に生まれ、平和と繁栄の時代に育った新世代の学生たちは、戦争の悲惨さとか戦後の苦しみを肌身で感じていない。世の中の矛盾にも敏感で革新的になる」と語った(『朝日新聞』1969年6月9日朝刊)。

³⁰ 松戸『ソ連という実験～国家が管理する民主主義は可能か』、序章「スターリン死後のソ連」第2節「社会の統制から社会との「協働」へ」、26-30頁参照。第20回党大会において、共産主義は国家権力のみが作るのではなく、社会、市民と協働して建設するものと述べられた。

まとめた事例として、1965 年 4 月～9 月に掲載された、「英雄気取りが行く」を取り上げる。ヴォルゴグラード近郊の新興都市ヴォルシュスキー市に住む女性の投書を発端に、5 月に 2 回、6～8 月に月 1 回、応答が紹介され、9 月に編集局がまとめの記事を掲載した。

以下、投書を掲載月日順に抜粋示す。引用中、「口」は口語、「俗」は俗語で、東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三編『研究社露和辞典』研究社、1988 年(電子版)の記載に基づく。

3.1. 「英雄気取りが行く」(Кто ходит в геройчиках?, 1965. 4. 24.)

最初の記事は、投書と編集局のコメントから成り、A4 判以下のサイズである。見出しは、投書の差出人ラリサ・М(Лариса М., 若年労働者)が、粗暴にふるまう労働者のことを「геройчики」と書いたことから、編集部が名付けたものである。ラリサ・М は、住宅が清潔で、町全体が緑化された自分の町を誇りにするものの、職場や広場で不快な出来事に出くわし、怒りを感じている。

職場の食堂、営業開始の 20 分前、私が待っていると、そこへ突然若い男性のグループが大きな音を立て、どやどやとなだれ込んで(ввалиться:口)来ました。彼らは大声で話し、笑い声を上げ、ドアをドンドン叩きます。私は笑って「あなたたち、ちょっと大人しくなさいよ」と言いました。すると、彼らは、誰、このキーキー言ってる(пищать:口)奴? と言い、私の方を向き[……]

機械組立工(монтажник)の集団は、ドアを挟んで給仕の女性たちと対峙、乱暴な言葉を投げ、とうとう入口を突破する。他にも、市民のダンス広場で「へべれけに酔った」(под градусом:俗)青年の一団が、ある男性を欄干から突き落とすのを目撃する。相談者ラリサ・М は「かっこいいものを作れるのに、何故こんな恥知らず(хам:口)なのか?」と問いかける。編集局は、一部の若者のふるまいの問題を認識する一方、労働者たちが厳しい環境で懸命に頑張っていることにも配慮し、両方の視点を併記して、一般読者に反応を呼びかける。

彼女は、もちろん、話を誇張しています。そして現れた気がかりな事実が、彼女が、良いもの、存在するもの、生活を占めているもの全てを見るのを妨げています。しかし、彼女と心配を共有しないわけにはいきません。

3.2. 記事に対する応答(抜粋)

3.2.(1) エフゲニー・カルポフ(Евгений Карпов, モズドク市(北オセチア)、1965. 5. 4.)

投稿者は、ラリサ・М と同じ町で、鉄骨組立工(арматурщик)として働いた経験を持つ。町が建設され始めた当初、住人は前線の兵士のように、バラックに住んでいたと回想する。投稿者は、この

町を作った、強く、勇敢で、決してへこたれない陽気な(неунывающий)人たちのことをいつか本に書きたいと考えており、投書の大半を英雄気取りへの弁明に当てる。

あらかじめ断っておきますが、私はこの若者たちをけなすつもりはありません。[……]襟のホックが開いているだの、街路で大声出してしゃべっているだの、そういうことを重い罪のように言い、青少年や若者を責め立てるような、巷の雄弁者(кухонные ораторы)に同調するつもりはありません。幸い今の[若い]世代はちゃんと一人前の人間として成長し、[もはや]余計な評価等必要としていません。ただ、数ある中にはクズもいるということです。

私たちは、若者の行動規範を受け容れ、彼らの行動に気づかぬようにして、避けて通ったりします。なぜなら、私たちは、真の英雄的労働の蓄積を、彼らの重要な本質だとみなすからです。[……]「この若者をどう裁くって言うんだ？ 奴は働いているじゃないか。大したもんじゃないか(будь здоров:俗)、凄いや仕事をしてるじゃないか！」[……]

しかし、投稿者は、英雄気取りたちの不適切な行為の重大性をも指摘する。「君たちは…いざという時は鬼のように働き、2 交代勤務の時間中ずっと現場を離れず困難や欠乏にも耐える。何故[勤務時間外に]人間でいられないのか？」と、文面の終わりで相談者ラリサ・Mに同調する。

3.2.(2) Р. бойко(Р. Бойко, ウクライナ、ヴィニツァ州、³¹ 1965. 5. 13.)

投稿者は同種の仕事の経験があり、「鉄骨組立工の生活は大変で、仕事場が次々変わる」、「家財道具一切なし」(ни кола ни двора)、「行けと言われれば、即、移動の生活」(жизнь на чемоданах)と言う。素行の悪い者がいることを認めるが、厳しい環境で頑張る労働者を擁護する。

3.2.(3) Б. парадиз(Б. Парадиз, 軍勤務、1965. 5. 13.)

この投稿者も同種の仕事の経験があり、建設労働者を責めるなという立場である。ただし理由は、労働者はそもそも粗野な人間で、小さなことに目くじらを立てても無駄だからである。

労働者は設計図に示されたとおりに、ただ命じられたとおりにやっているに過ぎません。労働者の大半はただ手を動かしている働き手であり、創造者ではありません。

³¹ 地名は掲載当時のものを用いる。

投稿者は、労働者は確かに街を建設したが、街がきれいなのは、建築家だけの功績であり、労働者、勤労者という言葉から、高い個人的なモラルや意識があると必ずしも請け合えないと言う。

3.2.(4) А. アレクセーエヴニン(А. Алексеевнин, ブラーツク市チカノフスキー区木材加工コンビナート労働者、国立イルクーツク大学通信制課程学生、1965. 5. 13.)

労働者の仕事や住まいの環境に同情し、労働者の素行の悪さは、日常生活環境の未整備が原因であり、「食堂のドアを突破した若者を社会のクズ(подонки)と見てはいけない」と述べる。

3.2.(5) К. エリグラシュヴィリ(К. Элигулашвили, オレンブルグ市、医学博士、1965. 5. 13.)

労働者の素行に厳しい態度をとる。「彼らは無思想で、金をしこたま稼いでは(зашибить:俗)、遊びほうけ(прогуливать:俗)、金を酒代に使います。[……]悪くて「腕白」(художество:口)で懲戒を受ける程度。こんな卑劣、不良は厳しく罰し、一般公開裁判にかけ、衆目に曝すべきです。社会の目から隠してはいけません」と批判する。

3.2.(6) И. ブスイレフ(И. Бусырев, モスクワ市、警察中尉、1965. 5. 25.)

投稿者は、相談者ラリサ・М が、英雄気取りたちの不適切行為をずっと傍観していた(в стороне)ことを、「コムソモールの積極性を発揮していない」、「醜悪な光景から目を背けている」と批判する。また、コムソモールは、英雄気取りを否定せず、彼らの生活に関心を持って取り組みと主張する。

3.2.(7) マルク・ポポフスキー³² (作家、1965. 6. 8.)

ポポフスキーは、軍医として前線で勤務したとき、仲間から尊敬されていたパイロットが倫理的な問題を起こし、「戦争は[全部]帳消しにしてくれるだろう」(война спишет)と言ったというエピソードを例に、英雄と称される人の中にも、人間としての自覚がない者がいると言う。

安全、公平(正義)、自由、平等に係る個人の権利は私たちの社会主義革命の基礎です(азбука и нашей Социалистической Революции)。我々にとっての市民は、自分が大きな集団の一員であることを常に忘れない人です。自分の欲望を社会の法規に合わせなければなりません。市民とは、他者の、社会の一員としての権利を尊重する人です。[……]

また、「人間、勤労者は、一日、ひと月、一年の仕事をどれだけうまく遂行するかで評価されてい

³² Марк Александрович Поповский (1922-2004、オデッサ出身のジャーナリスト、劇作家。軍の医科アカデミー、モスクワ大学文学部卒。1970年代「異端派」として活動、1977年米国に出国、居住)と考えられる。

ます。パーセントをたたき出し(выгнать:俗)、計画超過達成すれば、その日の英雄です」とし、社会全体の価値観が経済に偏重しているのではないかと問題提起する。市民の自発性が成長しない原因は、これまでの社会にあると考える。

市民の献身的な英雄的行為(доблести:雅)が、その後成長していません。しっかりと見ましよう、過去の、市民に対する大規模な無法(массовые беззакония)が、人民の創意に抑圧的に作用したのです。社会の積極性を活性化し、私たちの生活から恣意主義(волюнтаризм)、無法、個の軽視(неуважения к личности)の最後の残滓を根絶してゆく必要があります。³³

3.2.(8) ワレーリー・モゾリン(Валерий Мозорин, 1965. 7. 30.)

編集局は、「英雄気取りの告白」(Исповедь «геройчика»)という見出しで、「不遜に社会に挑戦状を叩きつける」現役の不良の投書を紹介する。警察や町の大人たちも不良を見て見ぬふりだと言う。

市民の皆さんは、言ってやろうかな、でも、「周りが」誰も加勢してくれなかったら？ やっぱりやめとうこうか、もしかして(чего доброго:口)救急車で運ばれるようなことになったら[……]とだいたいこんな具合にお考えでは。

投稿者は、「俺たちは避けられる(шарахаться:口)と気持ちいい」、「気合いを入れてやらなきゃいけない奴がいれば(подправить:口)、そのときは[暴力を]遠慮しない」、「俺たちを躰けようなんて思うな」と奔放な言葉を連ね、読者を挑発する。

3.2.(9) M. ミリ(設計長) ³⁴ (1965. 8. 10.)

(8)の投稿者、モゾリンに対する挑戦状である。大学を卒業した前途有望な、知人の息子がクリミアで不良に殺害されたことに大変なショックを受けている。

数日前、技師アレクサンドル・ミハイロヴィッチ・ヴァルシャフスキーはフェオドシアの町から棺に入った長男を連れ帰りました。[……]7月30日の本紙で、ワレーリー・モゾリンの傲慢な手紙を読み思った。英雄気取りよ、これはお前の仕業だ。分かんか、[……]若くて才能ある技

³³ 「大規模な無法、抑圧的」はスターリニズムについて、「волюнтаризм」は、フルシチョフ解任事由の一つとして言及されることがある。

³⁴ Михаил Леонтьевич Миль(1909-1970、航空技術者。戦時中は軍用機の開発に従事、戦後、自身の名を冠したヘリコプター研究所で、数々の機種を開発、レーニン賞、社会主義労働英雄等を受賞)と考えられる。

術者ヴァロージャ・ヴァルシャフスキーを殺したのはお前のような奴らだ。[……]おい、英雄もどき、お前は我々を恐怖に陥れるが、我々は恐れない、[……]お前に勝利する。

3.2.(10) A. ブーリン(A. Булин, 1965. 8. 10.)

差出人は服役中の元不良である。「ウラの世界」(блатной:俗)で、仲間と遊ぶ金を「調達」(достать)していて逮捕される。(8)の投稿者モゾリンに「お前まだ刑務所の「臭い飯」(пайка:俗、字義は配給飯)食ったこともないくせに、何やっても許されるとか言って、英雄を気取りやがって(строить из себя кого:口、さげすみ)」と怒りをぶちまける。

[……]もちろん、刑務所生活を味わえと言ってんじゃない。逆だ[……]冷静な目で人生を見ろ、もっと人生の地平を見ろ[……]でも、俺も、鉄格子の向こう側に来て(оказавшись за решеткой:口)初めて分かった。本当の人生は素通りし、若い歳月は空しく(впустую:口)去って行く。過去には戻れない。きれいな良心をもって、刑務所を出たら(俺はまだ3年位くらいおつとめが残っている)社会でちゃんとした仕事を見つける、仲間の集団も俺から顔をそむけないと思う。

3.3. 内容の検討

3.3.1. テーマとなるモラル

市民としての適切なふるまいに加え、他者、社会や周囲の事象に無関心にならないというモラルが前面に出ている。後者のモラルは、困っている人を助けるだけではなく、「モラル・コードクス」の「不正、寄食、不誠実、出世主義、飽くなき金銭欲を容赦しない」、「民族・人種の憎悪に寛容的にならない」等³⁵、否定的事象を見過ごさない態度でもある。

公式参考書も「無関心、自主性の欠如、怠惰」を否定する。³⁶ 無関心にならないことは、コムソモール員に求められる性格の一つである。1950年代半ば、イーゴリ・ペトロヴィッチ・イワノフ(Игорь Петрович Иванов, 1923-1992)³⁷ は、マカレンコ等の教育論を基にして、自覚的規律を持った若者の創造的活動のメソッドを構築した。そこでは、形式主義(формализм)、無関心、事なかれ主義(рутина)との闘争が中心的課題とされた。³⁸ これが、ピオネール、コムソモールの活動に取り入れ

³⁵ Программа Коммунистической Партии Советского Союза. С. 119-120.

³⁶ Коммунистическая Нравственность. С. 22.

³⁷ レニングラード大学哲学部卒業後、レニングラード教育研究所の大学院を経て、レニングラード教育大学教授となる。1952 年全ソピオネール連盟中央委員会の仕事に携わり、1956 年から、ピオネール指導員、活動の脱形式化を目指す実践活動に取り組む。1961 年に、『コムソモール』紙記者シモン・ソロヴェイチク(Симон Львович Соловейчик, 1930-1996)が一連の活動を取材したことで、イワノフ教授の方法論がソ連全土に広がった。

³⁸ コムナール・メソッドのサイト[<http://kommunarstvo.ru/istor/istkimust2.html>] 2023 年 12 月 28 日閲覧。

られ、³⁹ 1960 年代にコムニオン運動(Коммунарское движение)がソ連全土に広がっていったのである。

3.3.2. 記事の展開

記事は、七か年計画(1959～)の最終年、国全体が経済発展に全力を傾注している時期のものである。建設、農業、工業等の分野での労働者の自己犠牲的な働きぶりが日々報道される最中に、ラリサ・M の投書は読者にどのように映ただろうか。編集局には、若者の不適切な言動に関する投書も相当数来ていただろう。一方、労働の成果重視の風潮の中、多少の腕白は目をつぶる、仕事ができる者は往々にして「元気」であるといった考えがあったかもしれない。とすれば、編集局のプランは、高々、労働者の生活条件や自由時間の過ごし方の改善だったかもしれない。

編集局は、ラリサ・M の投書の約 10 日後に、概ね A3 サイズの大きさの(1)の投書を掲載する。さらに約 10 日後には、(2)～(5)のような、労働者の功績と、行為の不適切さを比較する投書が並ぶ。

その後、同年 8 月まで 4 回にわたり応答が掲載される。労働者の不適切行為を告発する投書が多くなり、併せて、周囲の人々の傍観が話題となる。(6)のように相談者ラリサ・M を傍観者として批判する意見も出る。(7)は、プロの作家で、計画達成偏重の風潮等を批判する。ソビエト市民として、無関心を克服し、自主的に社会の運営に参加しようとアピールする際、「массовые беззакония」、「волонтаризм」等、過去の政権を批判する語も用いる(註 33)。

現役の不良と称する人物の挑発的な投書(8)が掲載され、翌月、これを否定する(9)～(10)が掲載される。(10)は、不良行為の結末を読者に実感させる。

以上のような多数の投書(約 1,600 通)を総括する記事が、同年 9 月 17 日、2 面にわたり A2 判程度の大きさの記事となって掲載された。K. コジエヴニコワ(K. Кожевникова)記者のまとめの記事は「Ремесленники или творцы?」、「Человек за проходной」、「А куда милиция смотрит?」の 3 つから構成された。1 番目の「ремесленники」は、「創造者」=改善を志向し創造的に労働する者と対置され、言われたことだけを繰り返す労働者の意味で用いられる。「労働者は[……]ただの労働力ではなく、目的の明瞭さ、大きな内面の文化、自分の生の理想を持つ、最も進歩的、最も意識的な階級の一員」とし、仕事の英雄性と平素の言動は別物ではなく、一体的に評価されるべきとする。編集局は、ソ連の原則的な労働観に立ち戻り、労働者に高い資質を求めたのである。

2 番目は、労働者の自由時間の過ごし方の問題である。都会でも地方でも勤務時間後のやることかなければ、退屈しのぎに英雄気取りになる者(геройчик поневоле)が出ると分析する。

³⁹ コミュニオン運動は、文学、音楽、スポーツ等多岐にわたり、新聞編集活動もその一つだった。コムニオン運動の新聞編集活動が発展し、1963 年、『コムソモール』紙において、概ね月 1 度の頻度で、高校生スタッフが取材、編集に参加する高校生のためのコーナー「深紅の帆」(Алый Парус)が誕生した。

3 番目では、警察、社会団体、周囲の大人の役割について述べる。編集局は、民警の批判の投書が多かったことを踏まえ、民警の主導的役割を強調するとともに、コムソモール・パトロール隊の成功事例を挙げ、市民の取組みの重要性を強調する。⁴⁰

本件記事の構成の特徴は、編集局がある話題について双方の意見を掲載し、多かった意見を次回に反映させ、テーマを発展させていることである。まず、職務内容の過酷さ、住環境や娯楽等の問題を理由に、建設労働者を擁護する意見と、素行が悪いことを告発する意見が並行して掲載される。職場での奮闘にもかかわらず、仕事を終え守衛所前[職場の出入り口]の通路を出ると(за проходным)不適切なふるまいをする労働者へと話題が移行する。不良の挑戦的な投書で市民の無関心という問題が現れ、問題の深さがより多くの読者に実感される。編集局は、労働者、市民により高い資質、モラルを求めるとともに、「大人の無関心」に焦点を当て、フォーラムを締めくくる。

投書は、賛否だけでなく、その理由も含め多様であり、また、公式モラル言説から逸脱する言葉がしばしば現れる。(3)の投稿では、労働者の人格を見下しており、「ソ連は労働者の国」という公式言説や、経済計画達成に向け奮闘する労働者を称賛する報道に反するものであることから、編集局は、まとめの記事の中でバクー市のメンチェリャコフ(Менчеряков)の投書を紹介し評価に代える。

同志パラジス[(3)の投稿者]、あなたは労働者階級に、腹立たしい、軽はずみな言葉をぶつきました！ 労働者はよい図面をもらっても、正確でない、よくない、まずい部品を作ると。それは逆です。労働者は、悪い素材、図面から、設計者が知らないような部品を作ります。

編集局は、投書の影響を踏まえながら、投書の採択や配置について、議論がまとまって進行するよう工夫しており、読者と編集局が相互に影響を及ぼし合っていると考えられる。

4. 編集の方向性～その他の記事から

テーマ数(複数又は単線的)、投書の多様性(又は同質性)、公式言説との相違の度合いに着目し、さらに2つの記事の構成を検討する。4.1. は、掲載された投書が比較的同質であり、テーマも単線的、公式言説との相違が少ないもので、4.2. は、投書はより多様で、投書のテーマが複数あり、公式言説と合致しない言葉や考え方が多いものである。

⁴⁰ 1950年代半ば以降、犯罪件数が増加し、犯罪との闘争が緊要な課題となった。第21回党大会(1959)において「国家の死滅と社会における自治」の方針に基づき、国家機関の機能の社会団体への移管の方針が決定され、同年に自警団や同志裁判所が設置された(松戸『ソ連という実験～国家が管理する民主主義は可能か』、第4章「犯罪との闘い～大規模な「協働」の試み」、281-320頁参照)。

4.1. 「カーチャ・マリツェワさんの問いかけ—幸福って何だろう？」(Катя Мальцева спрашивает: В чем счастье?, 1962. 1. 3.)

4.1.1. 最初の投書

「読者フォーラム」(Форум наших читателей)というコーナーで取り扱われている。モスクワ州オレホヴォ・ズエヴォ市に住む18歳のカーチャは、コムソモールの派遣証明書(путевка)をもらってシベリアの建設現場で働きたいと考えている。親友リューバとモスクワに出かけたとき、カーチャは、偶然知り合ったリューバの旧友に、「一時の勢いでシベリアに行って[……]寒さの中、風雨の中、びちよびちよになって、顔も汚れてウロウロして嬉しい?」、「私は、モスクワの人間だし、人前でも恥ずかしくないモードで街を歩くのが幸福だけだね」などと言われる。カーチャは自分の夢が否定されたことに怒りを覚え、紙上で初めてシベリア行きの決意を公表する(周囲にも秘密にしていた)。その際、「в чем же счастье?」と問いかける。編集局は、検討の視点等を提示せず、特に人生経験を積んだ人(люди, умудренные жизненным опытом)からの応答を呼びかける。

4.1.2. 記事に対する応答(抜粋)

最初の投書から約10日後、1月14日に「幸福は誰の隊の中で歩むのか? (В чьих рядах шагает счастье?)カーチャ・マリツェワさんへの1626通の応答」という見出しで(A2判×1面)、4月11日には「幸福、1962年」という見出しで(A2判×2面)、様々な投稿が紹介された。

掲載された投稿は主に①カーチャより少し年長の労働者の生活描写、②戦争や十月革命後、ソビエト初期の時代を経験した大人の体験談の2つに分類される。

前者に属するものとして、教員免許を取得後、新興の町に移り住んだ、T. マルイゴワ(T. Малыгова, イルクーツク州シェレホフ市、教師、1962. 1. 14.)の投書がある。彼女は、厳寒の地の建設労働は「本当の浪漫が溢れんばかり」(поистине романтики через край)だったと語る。レンガ積み職人、起重機操作手を経験し、オリョールから、心の命ずるままに(по велению сердца)来た、エフゲーニーと結婚、息子ユーリクを出産、今は学校で働く。高層住宅やアルミ工場棟が建ち並ぶ街に住み幸福だと言う。

フレンチナ・センチャボワ(Валентина Сентябова, ノヴォシビルスク州ポドゴルナヤ村、キーロフ記念コルホーズ搾乳担当、1962. 4. 11.)は、夏は4時、誰よりも早く起床し、濃い霧の中、まつげに露を溜めながら牧場を車で走り、そして、気のすむまで(в свое удовольствие)、心行くまで(всласть:口)働くのが幸福だと言う。フルシチョフの第22回党大会での演説の一節「目標決定! 課題はつき

り！同志よ、仕事だ！」(Цели определены! Задачи ясны! За работу, товарищи!)⁴¹を引用する。

ウラジーミル・モモント(Владимир Момонт, セーヴェロモルスク(コラ半島)、労働突撃隊勤務、1962. 4. 11.)は、かつては、恋人と良い手取りしか見ていなかったが、社会活動に参加後、夜間課程に通うようになり考えが変わり、今は、胸に秘めた無限大の夢、真の友人、未来を信じること、仕事への愛等が幸福だと言う。この投書に対し、編集局は、「現在の幸福は、常に未来における幸福への一段である(счастье в настоящем времени — это всегда ступенька к счастью во времени будущем)」とし、それは「人類史上初めて(в истории Человечества)私たちの共産党がその指導理念(знамя)において、示したもの」とのコメントを添える。

後者に属する投書として、当時 30 代半ばの A. ピサレフスキー(A. Писаревский, スヴェルドロフスク州ヴェルフニャ・サルダ市、ボイラー技士、1962. 1. 14.)は、戦争中、機関車操作手のとき、前線で戦いたい一心で、故意に仕事で過失を犯した経験を語る。前線で仲間を救援し表彰されたが、英雄称号にまでは至らなかった。戦傷で手が不自由になり、ボイラーの仕事に就く。夜間課程に入ってはくじけること 5 回、6 度目の挑戦にして若年労働者学校を 34 歳で修了、1961 年、2 度目の挑戦で、高等教育機関に入学する。「生きることです！誠実に、目的意識を持って！闘争は永遠。安穏とした暮らし、「やりたいこと何ものなし」(«ничего не хотение»:口)は精神の卑劣です」と言う。

また、A. クイモワ(A. Куимова, ゴーリキー州シャフーニヤ市、教師、1962. 4. 11.)は、1942 年に中等学校卒業後(17 歳)、志願して前線に行った経験を語る。真の英雄たちとの出会い、解放された町々の住人や、戦争を共に戦い抜いた同志のために、平和を目指し闘争することが幸福だと言う。

H. ゴリツェフ(H. Гольцев, ザポロージャ市、年金生活者、1962. 4. 11.)は、自分の幸福は、1920 年 2 月、14 歳のとき、家族に内緒で赤軍に入ったときに始まったと言う。その後、ドニエプル水力発電所の建設で、現場責任者として勤務する。今、平和な新しい時代に、「革命の兵士の孫たちが、未開地に進路を取り」、労働していることを頼もしく思っている。「自分の、勤労者の、泥で汚れた手を見て初めて何が本当の幸福かを意識するのです。幸福は待ってくれず、親の温かい巣箱では孵化せず、また、引継ぎで受け取るものではありません。ただ、自分の羽を強くし、幸福を、自分から探しに出かけ、闘争と勤労の中で積み重ねるのみです」とエールを送る。

この 2 つの流れに含まれない投稿として、ワレーリー・III(Валерий III, レニングラード、中等技術学校 3 年生、1962. 1. 14.)がある。彼は、夢を見て気持ちが熱くするより、理性を指針として行動すべきで、カーチャも、何年かしたら、今の自分を笑ってしまうのではと言う。

個人生活の幸福なくして、人間は幸福にはなり得ません。社会的なことへの関心は[……]はっ

⁴¹ フルシチョフの演説は、この後「За новые победы коммунизма!」と続く。

きり言って、生活改善のための手段として二次的なものです。[……]もし浪漫(романтика)の中に幸福の源を求めるのなら、浪漫というものは現実の生活に突き当たると少しずつ吹き飛んでいきますから、そんな幸福はあてになりません[……]幸福な生活にとって最も基本的な要素は[……]現実の物質的消費の充足、社会の周囲の人たちとのよき相互関係であり[……]

この投書に対し、A. ゲルス(A. Герус, サハリン州ドリンスク市、1962. 4. 11.)が反論する。ゲルスは、児童養護施設で育ち、戦時中は前線に行き、戦後、靴職人、左官等を経験し、鉱山学校卒業後、高圧線の建設現場で土工をしながら、中等学校修了資格試験に合格、白ロシア大学に進学した。お金がなく、ミンスクまで無賃乗車をすることも何度かあったと言う。それでも「毎日精一杯やる仕事があり、力とエネルギーを最大限注ぐと、完璧な満足をもたらしてくれる」生活は幸福だったと言う。

編集局は、ワレーリーの言葉は「革命前の言葉」、「無賃乗車で共産主義に行こうとしている」と批判し、「社会の役に立つということは、革命の火を灯した者、五か年計画で最初に溶鉱炉に火を吹き起こした者、その灯でナチスのカギ十字を焼き尽くした者の後に続くことです」とコメントする。

4.1.3. テーマとなるモラル及び記事の展開

国は、労働を市民の義務とするとともに、労働に美德、大きな道徳的価値を付与する。若者はそれを受け止め、労働を通じて自己実現を図ろうとする。ブラーツク水力発電所建設等、シベリアの躍進は、社会主義躍進の象徴となる。国土全体の電化というレーニンの遺訓と、肉体を酷使して、大自然を征服することが、「共産主義の物質的基盤建設」に結びつく。⁴² シベリア等の国家プロジェクトの建設現場において突撃作業労働者(ударник)となることは「偉業」として、高く評価される。

労働は、もちろん、より豊かな生活の実現のためでもある。党綱領において、生活水準向上とあらゆる労働は一体であるが、若者の間で、ときに両者のバランスが崩れることがある。本項目のモラルは、労働の英雄性と生活の豊かさを等号で結ぶことである。

物資が豊かになり、生活水準が向上すると、モノへの欲望が高まる。「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る(от каждого—по способностям, каждому—по потребностям)」という共産主義社会のスローガンの後半部が強調される。若者にとって、外見のゆたかさへの志向が強くなる。1950年代半ば、流行追従の若者⁴³は否定的に評価されたが、その後、性別にかかわらず流行に敏感な

⁴² Вайль, Генис. Там же. С. 79-85, С. 124-138.

⁴³ スティリャーギ(стиляга)は、流行の服装や髪形を模倣する若者のことで、通常悪い意味で用いられる(『研究社露和辞典』)。ヴァルフォロメーエヴァは、スティリャーギは、マスコミや集会等で批判されたものの、男性モードの方向を変えたと評価する。さらに「我が国で若者がまだ総じて両親と同じ言葉で話し、両親が歌った歌、踊った踊りに興じていたときに、スティリャーギは社会と文化の伝統を壊す『立派な貢献』をしたと思う(ボリシェヴィキの革命家然り)」と述べ、古い潮流と対立する若者文化が生まれる端緒だったとする(Варфоломеева. Там же. С. 205-209)。

人々が増え、モードは社会の表舞台で認知されるようになる。外見や快適さよりも、能力、人間性、困難を克服する力といった内面を重視するソ連にあっても、暮らし方、金銭的豊かさは重要な価値観である。『コムソモール』紙も「お金の意味を否定したり、過小評価したり」することを「偽善的」と言う(1961. 2. 17.「お金を断る人はいるか?」(Кто окажется от денег?))。

編集局は、相談者マリツェワが、シベリアでの労働が御伽噺の対象となっている仲間の中で生活していると考え、マリツェワや読者が、労働の美德を理解することに迷わなくなることを目指したのだろう。記事では、若い友人たちと違う物差しで、真剣に接してくれる年長者の意見の役割が重要となり、当たり前のモラルを当たり前に肯定する態度が前面に出る。

したがって、編集局は、現代ソ連の幸福を、歴史や労働の英雄性に関する伝統的な言説に忠実な投書を用いてまとめる方策を取る。投書や編集局のコメントに、党やレーニンなどのイデオロギー的な語が多く見られる。ソビエト初期や大祖国戦争の困難を乗り越えた人々の経験は語り継がれる歴史であり、また、コルホーズや建設現場で今働いている若者たちの生活も、未来に記憶される歴史になろうとしている。いずれも疑問、反論の余地が少なく、読者に一義的な理解を求めている。

記事は、読者が、1962 年という時代に、様々な人間がそれぞれの労働の日常を送りながら一つの列を進んでいるという印象を受けるように構成されている。若い読者は、日常生活や新聞テレビ、学校の授業等で、年長者の体験を知っている。編集局は、若者が、今を生きるということは、年長者の懸命な努力の歴史を引き継ぐことだと理解するよう期待する。

全体として、単線的な流れの中で、内容の同質性が高い投書が採択されているように見える。公式言説から逸脱する考え方は、相談者マリツェワの投書中の、お洒落好きなモスクワの女性と、ワレーリー・Ⅲ(前頁上段)だけである。モスクワの女性は、批判を受けることがなく、ワレーリーについては、著しくモラルに反する考えではないものの、社会活動参加に消極的である点について、編集局は否定的な評価を下す。投書の採択、配置において、編集局の関与がより大きいと考えられる。

4. 2. 「それぞれの能力と生きる道—凡人になりたくない……」(Способности каждого и место в жизни: Не хочу быть средняком..., 1964. 3. 11.)

4. 2. 1. 最初の投書「

モスクワ州レウトフ市、アナトーリ・ペトルシン(Анатолий Петрушин)は、10年生修了後、進学を希望するものの、学ぶ分野を決められず、結局、カラガンダ鉱山(カザフ共和国)に就職する。坑道掘削人、電気取付工を経験、専門技能も身につけたものの、進学の夢が断ち切れない。

しかし、ペトルシンが大学に行きたい理由は、何か学びたいことがあるからではなく、ただ凡庸な人間(средняк:口)になりたくないためである。彼は「気が付けばそんな類いの人間になるのでは

ないかと恐れます。そんな絶対嫌です、悪い技術者になるなら、より良い労働者でいる方がマシです。「凡庸な人」の部類にも「ありふれた人」(рядовых)の部類にも入りたくありません」と言う。「持てる全ての力、知恵、知識をフルに使い、最大の利益をもたらし、自分が必要とされ、一人前で、満ち足りていると思えるような、自分の本領が発揮できるような領域をいかに見つけるか？ 最高の、精力的な人生を送り幸福になるにはどうすべきでしょう？」と相談する。

編集局は、この相談を、個人の問題ではなく、若者全般に見られる一つの傾向だと見て、いくつかの視点を例示し応答を呼びかける。ソ連では、労働者は英雄で、凄い(знаменитый:俗)敬意を受けるのに、どうして若い人々は旋盤工や搾乳婦より、詩人や映画俳優、サッカー選手の方を好むのか？「ありふれた」、「凡庸な」と「並み」(заурядный)、「平均的」(посредственный)とは何か？編集局は、レーニンの「**我々の義務は今や才能を[……]見つけられるようになること、そしてそれを仕事に結びつけることだ**」(Наш долг теперь уметь найти[……]talantы и приставить их к работе:原文太字)を引用し、生きる道の選択の自由は、新しい社会の大切な権利の一つだが、中には、悪名高き高給目当てで仕事をコロコロ変える人間(летун:口語)もいると指摘する。

4.2.2. 記事に対する応答(抜粋)

ペトルシンの投稿から約1週間後の3月19日、その後、4月、5月に月2回、6月、7月に月1回の応答が掲載される(他に7月8日に店舗販売業についての経済学者のコメントあり)。さらに、翌年1月にはまとめの記事があり(1965. 1. 22.~24. 26~27.)、そこでも投書が追加で紹介された。

反響は大きく、応答は概ね、①ペトルシンの現職を含め労働一般を賛美するもの、②ペトルシンの考えに呼応し、自分の境遇や周囲であったことを語るもの、③編集局が提示した「並みの労働者」や仕事の天分(призвание)等の意味について検討するものの3つに分けられる。

第一の労働賛美は、年長者の投書に多く見られる。B. イワノフ(B. Иванов, リヤザン市、機関車運転手、1964. 3. 19.)は、50歳前後。5歳で父を亡くし、生計を助けるため15歳で蒸気機関車副操縦士の仕事に就く。戦前、戦後、機関士一筋である。「至る所で自分の仕事が汎用になったもの、みんなが目にする技術の進歩を見ます[……]運ばれたレンガが、コムソモリスク・ナ・アムーレ、マグニトゴルスク、ドニエプル水力発電所の礎に置かれたことを誇ります」と言う。相談者ペトルシンの進学希望を否定しないが、自分の仕事をもっと誇るべきとアドバイスする。

ミハイル・シユル(Михаил Шур, モスクワ、1964. 4. 3.)は、野心を持ってもよいが、それが叶わないときは「ありふれた人で居続ける謙虚さや誠実さ」、「凡庸なままでの勇氣」を持てと言う。「ブルジョワは労働者の力を貶めなければならないから、何とかして普通の労働者の仕事を低く見ようとしますが、我々はそんなことする必要はありません」と言い、凡庸な労働者、毎日職場に通い、毎年

同じことをする人は「人類の労働の栄誉」であり、「世界の労働の天才」だとする。⁴⁴

第二の流れについて、ヴァレンチナ(Валентина, ドネツ州、クラマトルスク市、店舗販売員、1964. 3. 19.)の投書は、自分の劣等意識を綴る。彼女は、自分の仕事を含め、レジ打ち、車掌、郵便配達、会計担当には高い資質や目標意識はなく、養豚家、子牛飼育員や農場労働者の方が「人々の役に立っており、自分の仕事の成果が目に見え」ずっと素晴らしいと言う。また、能力開発の努力をしていないことを「社会に反する本当の犯罪行為」と言いながら、大学に行く気はなく、同年代の女性たちが、働きながら勉強しているのを見ても羨ましいと思わない。自分の仲間の生き方も「もちろん、よく話題にのぼるような、共産主義社会の全面的に発達した人間の高い理想(высокий идеал всесторонне развитого человека)には合致していません」と自己肯定を試みる。

しかし、投稿の終わりでヴァレンチナは「新しい人間」になりたいという強い願望を語る。「一人ひとりが自分だけの「私」を見つけなきゃ！ 自分だけの自分を！ 絶対！ 自分を新しい人間に変えるために、必要なだけ、永遠に議論を続けたい」と強い気持ちを述べる。

匿名希望の H は(1964. 4. 3.)は、ひたすら自分のことを書き綴る。大学受験に失敗し、父の紹介で食品衛生研究所に就職する。翌年も不合格で、今は受験勉強も止め、嫌々勤務を続ける。夜毎、知人の集まりを渡り歩き、外国のレコードを聴いて踊るのが楽しい。彼女は、自分たちの仲間はファッションセンスが高く、センスがない「平民出身」(плебей: 歴史用語)を見下げる。しかし、H は、ある集まりで、3 歳ほど年上の、服装センスも素晴らしいオレクと知り合い、考え方が一転する。

いつだったか彼はタイガの建設現場のことを話し出しました。私の仲間内ではその手の話は好まれず、そんな辺鄙な所に行く人は、平民出身のオカしい人(псих: 俗)だと思われていました。冗談半分で「貴方、もしかして徒食者とかで送られたの？」と聞くと、彼は、私が酔っているとでも思ったのか、怒りもせず答えました。「違うよ、うちの探検隊が頑張っているんだよ」。

オレクは科学研究地質学大学の研究員助手だった。オレクが長期でシベリアに出かけ、二人の付き合いも途絶えるが、H はオレクのことを知ってしまうと、古い仲間が浅薄に見え、もう元の仲間の所に戻れない。自分に愛想が尽き、何とかしようとするが、「関心あること[……]何もない。根気強く我慢して勉強するなんて、とうに忘れちゃったって感じ」と、立直りの糸口がつかめない。編集局に自分の手紙の掲載を懇願、自分も幸福になる権利があり、読者の意見が聞きたいと言う。

⁴⁴ カテリナ・クラークは、著書(Katerina Clark, *The Soviet novel: history as ritual*, Bloomington: Indiana University Press, 2000)の中で、1920 年代後半～30 年代のソ連文学において「小さな人間」、すなわち、バラバラの個人が国家(「大きな家族」)に位置付けられ、日常的、実務的な労働を通じて社会の発展に貢献することでアイデンティティを獲得する人々に注目が集まったと指摘する(91・117 頁)。ただし、後に人間を機械の部品にたとえる表現につながり、とりわけ、「個人崇拜」批判の後には、「創造的労働」と対置され、若者に強く否定されることとなった。

この投書に、Т. П.(ヴォロネジ市、1964. 4. 25.)が応答する。彼女は、中等学校卒業後、就職も進学もせず、ダンス場、レストラン等で過ごし、シベリアに行く者を「肉体労働者」(работяга:俗)と呼びバカにしていたと言う。コムソモール会費未納で呼び出され、地区委員会の指導員と話し合い、自分の駄目さ加減を思い知る。今はシベリアで働く友人の所に行こうと考えている。

ナターシャ・С.(Наташа С., シンフェロポリ市、1964. 6. 4.)は、大学の同級生ビクトルが、卒業後技術者になる見込みが出ると、急に付き合っていた販売員ニーナを「対等じゃない」(неравенство)と言い出し、ニーナと別れ、豊かな生活目当てで技術者候補の女性と結婚したことを告発する。

ヴィタリー・コルニーロフ(Виталий Корнилов, ニジニ・タギル市、1964. 7. 2.)は、相談者ペトルシンの悩みを「くだらない」(чепуха)と一蹴する。コルニーロフは25歳、旋盤工をしながら、ウラル総合工科大学(УПИ)の通信制課程で学んでいる。勉強するに至った理由を明快に説明する。

[……]ずっと汚い現場をうろうろして、いつまでも大きなハンマーを振り回したくないからです。堂々と(авторитетно)申し上げます、それだけです。切断工になって、炉のガスを吸い込みたい人なんていません。誰も、より楽な仕事をもらえるなら、絶対に考えることなくそっちの仕事に行きますね。[……]学歴がある人は、切断工や研磨剤の吹付けなどしません。当たり前でしょ！ ホコリを7時間吸い込んで、ハンマー持って中風患者みたいにブルブルして150ルーブル、一方で、何処かの技術班で座って働いて同じ金をもらえるんですよ。僕は、ナターシャ・С.[上述、6月4日掲載]が書いていたビクトル君、分かるなあ、当たってます。

第三の流れ、労働の意味の検討については、まず、В. ロスクトフ(В. Лоскутов, ムルマンスク市、1964. 5. 6.)は、シュルの投書(前頁上段)の、「人並みの」仕事を讃美する意見に対し、目的意識が欠如していると批判する。そして、相談者ペトルシンには、ただ毎日仕事に通いたくないだけのために、大学に行くのは時間の無駄と言う。

また、В. ゴルブノフ(В. Горбунов, トウーラ市、1964. 5. 6.)は、人間には才能にも職務にも格差があると主張し、店頭販売員の仕事を「凡庸の極致」と呼び、また、才能がない人間が、「天分に多くの注意を割く」ことは、社会の損害につながると言う。怠け者(бездельник:口)や高給狙いの職業転々人間、ぐうたら(лоботряс:俗)は天分探しを口実にサボっていると言い、職を変えるなど忠告する。

また、ユーリー・グリゴリエフ(Юрий Григорьев, ヴォルクタ市(北極圏)、1964. 5. 24.)は、ソ連では、労働は偉業であり、超人、凡人という区別はないと言う。「凡人は無理に天才になろうとするな、天才になろうとしても馬鹿をみるのがオチだとか何とか[……]全く有害な意見です」、「お店のカウンターの向こうで、トラクターを操縦して、鉱山で、建設現場で時代を作っているんです[……]創造に携わる人たちへの過小評価は許せません」と不快感を示す。

М. Ф. フドプキン(М. Ф. Худобкин, レニングラード、教育者、1964. 5. 24.)は、人民の利益につながれば、全ての仕事は偉大とし、ゴルブノフを批判する。労働者を、「偉業をなし遂げようと考えもせず、一人の献身的な人間として、ツァーリの監獄を経て革命に向かった者たち」、大祖国戦争の戦火の中を、「栄光のためではなく、地上の生のため、解放者の[……]隊列を組んで歩んだ者たち」に並列する。相談者には、勉強したい分野がなければ、進学しなくてもよいのではと言う。

初等教育さえ十分に受けず、きょうだい一人に割り当てられた 8 分の 1 フントのパンと 2 人で 1 丁のライフル銃で(с осьмушкой хлеба на брата и одной винтовкой на двоих)十月革命の成果を守った我々の祖父や父は、永遠に、高尚さ、道徳的な美しさの模範となるでしょう。我が国の共産主義の確信は、何にも勝るとも劣らない献身的活動と一人残らず我々全員の組織的規律を求めます。ただ、この規律が教育のみを通じて実現されるとは考えられません。

4.2.3. テーマとなるモラル及び記事の展開

個の尊重、「人間の全面的発達」の時代、若者の中に、自分の考えで人生の道を切り開く意識が高まる。若者は、時代が年長者たちの頃から既に変わっていると考えており、労働での創意発揮や有意義な自由時間の過ごし方を通じ、もっと自由で軽やかな、オリジナルな「自分」になろうとする。自分に無関心でいられなくなる一方で、自分らしさを追求するあまり、若者はときに自分の資質やなすべき仕事に分からなくなる。オリジナリティの実現が行動規範の一つとなり、若者を拘束する。思い描くように生きていないと感じると焦りを覚える。

自分らしい生き方というモラルは、60 年代のソ連の若者に特徴的だと考えられる。この記事以外にも、1960 年 1 月 4 日付け、「天分をどうやって見つけるか？」(Призвание!.. Как это найти?)では、選んだ学部や職業と異なる専門に関心を持ち、転部、転職を希望する投書が掲載される。また、1969 年 9 月 20 日付け、「自分自身になるには？」(Как стать самым собой?)では、仕事で、自分が簡単に別人と交換されることに悩む大学生の意見が掲載される。

まとめの記事⁴⁵のメインの問題意識は、社会の成熟(мужать)と労働の意味の変容である。編集局は、「凡庸な人間」と職種は無関係という立場である。編集局は、ソ連が労働者の国家であり、全ての労働が等しく有益であり、敬意を表すべきだと強調してきたにもかかわらず、ソ連人の中に、職種に対し上下の意識が生じているのは何故かを検討しようとする。「凡庸」、「小さき人間」、生物学的な素質(1965. 1. 22.)、献身・清廉、物質的な豊かさの追求、自尊心・功名心、上昇志向

⁴⁵ Б. Панкин, В. Чикин の 2 人の署名記事。前者は Борис Дмитриевич Панкин(1931-、同紙勤務(1953-65)の後に外務大臣、外交官)／後者は Валентин Васильевич Чикин(1932-、同紙勤務(1958-83)の後に『ソビエツカヤ・ロシヤ』(Советская Россия)紙編集長)だと考えられる。

(карьеризм)、リーダーシップ(1. 23.)、自分の仕事への敬意と不満(1. 24.)、職業の上下観(1. 26.)、教育と職業選択(1. 27.)等について、読者からの手紙、学識経験者の意見等を踏まえて考察している。「凡庸」は能力の概念ではなく、仕事に対する姿勢の概念であること(1. 23.)、職業の序列、才能の開発は社会的な問題であること(1. 24.)等が強調されている。

ただし、このテーマに対する上記の 3 つの流れは、それぞれの流れの中で、話題が水平に広がり、多様な意見が出たものの、それぞれの流れが繋がらず、テーマを垂直に進展させることが難しくなると考えられる。労働を賛美する年長者にとって、職業を選べるだけで幸福であり、職業と人格が密接につながる時代で閉塞感を感じる若者の意識との間に溝がある。また、若い世代が、ある職種を見下げたり、大学進学はただ肉体的にきつい仕事をしたくないからだと言ったりしても、まとめの記事でのコメントが難しい。編集局としては、若者たちの言葉を都度否定しておらず、結果として、現代の労働の諸側面を論じることとなる。1 千通を超える反響に対し、編集局は懸命にコメント(5 日間にわたり合計概ね A3 判 4-5 頁分)しているが、問題提起に止まっており、編集局のコントロールが、3 章や 4. 1. に比べて小さいと考えられる。

以上、整理すると、次のようになる。

■ 記事構成

	英雄気取り(3)	幸福とは(4. 1.)	凡人になりたくない(4.2.)
テーマの流れ	複線的 (テーマ進展、大きな テーマに収斂)	やや単線的	複線的 (複数のテーマが ³ 併行)
投書の多様性	多様	同質性が高い	多様
公式モラル言説からはずれる言葉	多い	少ない	多い
公式モラル言説からはずれる投書への批判(判定、評価)	読者の批判投書掲載 (編集局は評価せず)	読者の批判投書掲載 + 編集局のコメント	読者の批判投書掲載 (編集局は評価せず)
編集局と読者の影響力バランス	読者と編集局が相互に影響	編集局 > 読者 (投稿の募集、採 択、討論の総括)	編集局 < 読者 (若者の生活実態への 編集局のコメントなし)
討論のまとめ	大(テーマ毎に共通 認識が形成)	大(編集局の狙い、 メッセージが明確)	やや小(問題提起に止ま っている印象)

5. 新聞における投書の編集

新聞は社会の約束事、条件性の下発行されるものであり、ここでは、条件性への評価ではなく、編集局がどのような方向性で、読者の声を取り上げたかに着目する。記事の編集のプランとして、「真正性のある日常の提示」、「意味のずれ」、「共同体的空間の形成」の3つの観点を検討する。

5.1. 真正性のある日常の提示⁴⁶

2. 1. で述べたとおり、共産主義モラルは、経済的目標の達成、生活水準の向上と直接に結びついたものであることから、職場や学校、家庭等で実感されるものでなければならない。

モラルが受容され、日常生活の中で応用され発展する過程で、何らかの齟齬、違和感が生じる。『コムソモール』紙は、齟齬や違和感が職場や学校の慣行や意識の中で解消され、共産主義モラルが若者の行動規範や価値観に円滑に組み入れられるようにしなければならない。日常生活から、職場、学校コムソモールでの研修会等で題材となるような断片を取り出し、焦点を当てて分かりやすく提示し、注意を喚起しなければならない。そこで、まず、記事の中に真正な(真正に近い)日常が表れるよう工夫する必要がある。

第3章、第4章で示したテキストにおいて、真正性に関する6つの特徴を挙げる。

第一は、労働に関する記述が詳細にわたっていることである。労働の現場を曖昧にせず、労働者の職種、技能、肩書き、経歴、生産工程の用語、機械器具の名称、働いている場所等を具体的に示す。これらの記述は、読者に、人々が技能や経験を活かし職責を果たし、社会に利益をもたらしていることを実感させるとともに、他職種の労働者への関心を促す。

第二は、テキストの中に、口語、俗語、若者言葉等が多用されていることである。これらの言葉により、読者は、投稿者に直接に語りかけられている印象を受け、記事の中の世界をリアルに疑似体験することで、テキストに反応したいと思うようになる。

第三は、公式モラルと合致しない言葉がたびたび現れるものの、編集局が必ずしも一方向的な評価をしないことである。記事は、編集の様々な段階での検討、決裁を経て掲載され、その際、編集局は、公式の言説に反する言葉や、公序良俗に挑戦する態度も削除せず、また、都度批判しない。編集局は、投書内容への判定を読者に委ね、読者において、非礼、反社会、モラルに合致しない人物や事象等を認めない態度が育まれることを期待する。

⁴⁶ 王令薇『《中学生日記》のメディア史—自主性を演じるドラマ』創元社、2024年、22-28頁参照。王は、NHK名古屋放送局制作のTV番組『中学生日記』(放送1972-2012)において、描かれる中学生の日常が、演技・演出でなく、自然なふるまい、本音であるという印象を与え(=真正性)、また、視聴者は、他者の「表領域」より「裏領域」に真正性を感じると言う。裏領域も演出されており、表領域と裏領域の間の壁は次第に不鮮明になったと指摘する。

第四は、投書において、レーニンへの言及や、党、思想、その他共産主義に特徴的なイデオロギーの言葉が少ないことである。『コムソモール』紙は、党大会、レーニン生誕や十月革命等の記念日、宇宙飛行等世界的な偉業の際に、ソ連社会のアイコン的な考え方や言葉を掲載するが、読者の投書の中には、イデオロギーの言葉は少なく、ましてや、まだ自分自身のことしか責任を持たない若者の言葉にはほとんど見られない。

第五は、投書の中の物語が、読者が読んでいるときも進行しており、完結していないという印象を与えることである。

投稿者は、書かれている対象や「私」を、ある時間遅れてから時間の流れの中に置き直し、何かしらの意味を付与し、自分の周りで起きたことを外から見て形象化する。⁴⁷ 若者たちの見通しは、短い時間のスパンの先にあり、また、時に誇張や冗漫があるものの、同時に切実な思いがあるという余韻を残す。一方、年長者の語る言葉においては、書く内容はより取捨選択され、物語がコントロールされ、結論が用意されているように見え、未完さの感覚は薄くなる。

討論が活性化されても、解決や大団円には至らず、思考の糸口が多少見える程度であるが、未完さの印象は、現在も何処かでこの投稿者が生きている、時空間を共有している感覚を与える。

第六は、日常生活から共産主義モラルを考える際、英雄たちの偉業等の肯定的な事象よりも、人間関係における衝突や職場の問題等、否定的な事象に関する記述が多くなることである。

肯定的事象を育むことと、否定的事象と闘うことは共産主義モラルの構成要素である。党も、国内に旧社会の、ブルジョア的な慣習や心情が残っていると認識している。新しい時代への見通しを理解するためには、否定、否認により、過去との相違点を明確にする必要がある。そもそも、日常の意識には「現状の否認」がある。⁴⁸ 日常生活において目立つことの多くは、反発や疑問等否定的感情を起こす人物や事象である。⁴⁹ 他者との不一致や衝突の中から、自分らしさが浮かび上がることがあり、否定的事象は、他者の視線から、新しい自己を発見する契機ともなり得る。記事において、問題行動や不道德等が、普段の言葉づかいで縦横無尽に語られるとき、読者は意見を述べたいと触発されるのである。

第3章、第4章の3人の相談者は、中等学校を卒業した、又は卒業予定の若者である。彼らは社会一般の道徳を一定理解しており、自分の視点と社会の現実の折合いについて考える能力を既に持っている。故意に道徳の反転を試みたり、また、シニズムや無関心に走ったりすることなく、自主性を持って考えようとしている。そして、編集局や読者が自分の考えに同調して欲しい、せめて自

⁴⁷ 中村唯史「序—自叙についての迷宮的前置き」、中村唯史、大平陽一編『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』水声社、2018年、11-17頁参照。

⁴⁸ 白井聡『未完のレーニン〈力〉の思想を読む』講談社、2021年、241頁参照。

⁴⁹ 難波江和秀、内田樹『現代思想のパフォーマンス』光文社、2004年、48-49頁参照。

分の心情を理解し、何か言って欲しいと望んでいる。読者の共感や自主性を呼び起こす真正性は、モラルの訓育の重要な契機となるのである。

5.2. 意味のずれ

アレクセイ・ユルチャクは、とりわけ 1970 年代以降のソ連の言説を分析し、ソ連における権威的言説について、欧米のそれと同様に説明できると考えた。

国家統治システムに正当性を与える言説の一般性について、ユルチャクは、フランスの政治学者クロード・ルフォールの理論、すなわち、近代国家のイデオロギー言説は常に何らかの客観的で疑いのない真理に依拠し、そのような真理はイデオロギー言説の枠外にあるという理論(ルフォールの逆説)⁵⁰ を適用する。また、権威的言説の意味のずれについては、ジョン・オースティンのコンスタティブ(事実確認的な言語行為)とパフォーマティブ(新たな意味を作る、何かを変える言語行為)という概念を適用する。⁵¹ 一つのコンスタティブな言語行為でも、受け手が話し手の意向を受け取らなかったり、また、受け手が予想外の意味を獲得したりするのは、パフォーマティブな力によるもので、そのような力がソ連においても作用したとする。

チャールズ・テイラーは、近代欧米におけるモラルの広がり の過程について次のように述べる。

当初はごく少数の人の唱える理論でしかなかったものが、おそらくはエリート層から始まって次第に社会全体まで拡がってゆき、社会的想像[自分を取り巻く社会的環境のイメージ]にいつのまにか浸透するようになる。⁵²

テイラーは、道徳の理念が社会のより広い層に浸透するとき、当該理念が身近な事象と結びつけられ論じられる経過を辿り、その際、道徳の理論にずれが生じると言う。⁵³

ある理論が社会的想像のなかに浸透し、これを変容させるという場合、そこで付随して生じているのは正確にはどんなことなのだろうか。たいていの場合は慣行が懸案として取り上げら

⁵⁰ アレクセイ・ユルチャク／半谷史郎訳『最後のソ連世代:ブレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017 年、15-24 頁。

⁵¹ ユルチャク／半谷訳『最後のソ連世代』、24-35 頁。

⁵² テイラー／上野訳『近代 想像された社会の系譜』、32 頁。

⁵³ 否定的事象の言説について、テイラーは、「[……]この礼儀をたんに支配者層にとどまらず、はるかに広範な社会階層にまで拡張させようとするプロジェクト[……]規律化によって非エリートを改造するというプロジェクトのほうは、礼儀に含まれる様々な特徴がそのまま永遠に単一の階級特性でありつづけるのではなく、むしろより広い範囲に拡大してゆくことを意味するであろう。しかし、それと同時に人々を作り変えるという目標そのものには、それ以前の古い秩序概念ときっぱり訣別したことが示唆されてもいる」と述べる(テイラー／上野訳『近代 想像された社会の系譜』、65 頁)。

れ、その場で取り急ぎ慣行がつくられ、人々はこの慣行に誘導されてゆく。このときこの慣行は新たな展望によって、つまり何よりもまず理論のなかに表現された展望によって意味をもつようになる。この展望こそが新たな慣行に意味を与える文脈になっているわけである。こうして先例のない新たな理解が、かつてなかったような方法で、参加者たちに利用可能なものとなる。そしてこの理解が彼らの世界の輪郭を象るようになり、ついにはあらためて語ることもできないほど自明な事柄とみなされるようになる。

とはいえこの過程は、もっぱら理論のほうが社会的想像を作り変えるという、一方的な過程ではない。行為が意味をなすようになるとき、理論はいわばねじ曲げられ、こうした慣行の背景をなす文脈という特殊なかたちを与えられる。⁵⁴

テイラーは、モラルの広がりにおいて、理論、展望、慣行の3つのモーメントに着目する。慣行には、日常生活が含まれていると考えてよい。モラルの理論の広がりに伴い、日常生活の慣行が見直され新しくなる。慣行が新しくなると、改善点が展望となり、モラルの理論は背景化する。

この理論モデルが、国家や党が市民に対し、必要な市民モラル形成を直接働きかけたソ連に起こることは、党綱領が、一人ひとりが、それぞれの日常に照らして共産主義モラルを考え鍛える、すなわち、共産主義モラルの理論は、職場、学校、家庭等の日常生活と結びつき、日常の諸問題が解消されることにより徐々に実現されたとしたことと矛盾しない。日常の慣行の見直しの際は、不合理が解消される効果といった展望が前面に出る一方、共産主義モラルのイデオロギー性は「慣行の背景をなす文脈」へと後退する。慣行が新しくなる過程で、既存の諸条件との調整が図られると、不整合を正当化する口実が作られるなど「理論のねじ曲げ」が起きるのである。

もちろん、自分の意識や行為が、美德とされるモラルに適えないとき、自分の考えやふるまいの正しさを根拠づけ、権威を持たせようとする場合にも「ねじ曲げ」が起きる。3. 2.(8)のように、市民の消極的態度を嘲笑して自分の不良行為を正当化したり、4. 2. のように、仕事や勉強に頑張れない者たちが結束力を高めるため、シベリアに行く者を「平民出身」と呼んだり、仲間内に共産主義の理想に合った者は「もちろん」いないと言ったりすることは、モラルの反転による自己肯定である。

このような故意のモラルの誤用、悪用だけでなく、自然に意味のずれが起きることもある。高等教育を受ける機会の拡大や職業選択の自由が広がると、人気がない仕事に就く者は努力不足と見なされ、職業に優劣ができる。社会に役立つ労働は等しく英雄的であるというモラルが、侮辱や劣等意識に変質する。

共産主義モラルの尺度は、肯定して従う者の中にも、反抗して否定する者の中にもある。共産主

⁵⁴ テイラー／上野訳『近代 想像された社会の系譜』、40-41 頁。

義モラルが全人類的な特徴を有し、否定が困難な性格のものであっても、それが社会の人々に共有されるプロセスで、モラルの反転、誤用、悪用、意味のずれ・ずらし等は起きるのである。

5.3. 共同体的空間の形成

編集局は、投稿による話題の展開を通じて、新聞の中に共同体的空間が形成されることを目指したと考えられる。メディアの中に共同体的空間が生まれることは、当該メディアの権威を高めることにもつながる。

共同体的空間は、党綱領が示すモラルの基準に当てはまらない善意(ときに悪意)の若者にも寄り添う役割も担う。新聞は、社会の出来事について両論併記し、また、コメントを付さないことも含め、明確な判断をしないことで、モラルの基準に必ずしも合致しない者が生き、いつの日か、正しいモラルを正しいと認め受け入れることを期待する。

共同体的空間において、読者の意見が一定の権威を持つ。第3では、編集局は、投書の傾向を踏まえ、英雄気取り集団に、不適切なふるまいの口実を与えるのを止める。共同体的空間での意見が編集局に影響を与えたのである。

また、意見が尊重される読者や投稿者は、不特定多数の読者の視線を感じ、社会の眼差しを意識する。投稿者は公式言説をリライトするのではなく、社会において、ある代表的な意見と同意見の「私」として意見を述べようとする。⁵⁵ 読者は、自分を見つめ直し、自主的に適正な行動規範や価値観に取り入れる。そのため、投書は、同意・不同意だけでなく、理由やアプローチ等も含め、多様になるよう配慮される。意見の適否の判定は、しばしば、共同体的空間の他のメンバーに委ねられ、主催者の編集局は直接評価を下さない。討議の参加者は、リアルな光景が描写される投稿に対し、私ならこう言う、こうふるまうと思索し応答する。模範的でないものの、多くの者が共感するような回答を出したり、肯定的事象を否定したりすることあるだろう。市民モラルの獲得という合目的性の下、自由な思考や言葉が保障されるのである。

共同体的空間での投書の編集において、第3章の「英雄気どりが行く」はテーマの発展性、発展

⁵⁵ テイラーは、「公共圏」を、メディアを通じ、社会の成員が互いに出会うことを想定する一つの協働空間と定義する。そこでは、始めから結果が注意深く統御されているにもかかわらず、あたかも意見交換を通じて共通の意見を形成する純粋な過程が順調に進んでいるかのように、全てが執り行われるとする一方、公共圏において参加者は、個人的な利害を離れ、不偏不党であろうとし、党派心からの言動を慎み、自らの特殊性を否定し、私的で偏った見方を超越しようと努めると指摘する(否定性原理)。そうすることで、人々は、討議は正当性を持つと想像し、公共圏は政治的なものに依存しないという独自の価値を持つようになるとする(テイラー／上野訳『近代 想像された社会の系譜』、第6章「公共圏」、119-145頁参照)。また、共通善の追究の過程では、非合理を見極め、普遍的といえない見解を批判、拒絶することも参加者に啓発される(トーマス・マッカーシー「実践的な討議:道徳と政治の関係」、クレイグ・キャルホーン編／山本啓、新田滋訳『ハーバーマスと公共圏』未来社、2000年、41-42・56-57頁参照)。本稿では、『コムソモール』紙は、論点を一つに統合させるより、意見交換、議論の継続に重点を置いていると考えられることから、「共同体的空間」とする。

したテーマに対する投稿者の多様性から一体性への移行という点で、より成功していると考えられる。第3章や4.2. は、いわば舞台裏を見せることで、読者の多様な発想を刺激するものである。4.1. のように、ソ連のオーソドックスな言説を中心に据えることも選択肢の一つである。公式参考書においても、共産主義モラル訓育の方法として、年長世代の語りの活用が挙げられている。⁵⁶

なお、ユルチャクは、ソ連の権威的な言説は、概ね 1960 年代から、常套句の使い回しが始まるなど、権威的言説は硬直化し、意味レベルで文字通りに解釈されなくなったと分析する。その結果、人々の間に、総じて公式言説を受け入れながらも、仲間たち(スヴァイー)⁵⁷ と共に、公式言説の意味を変化させる私的な空間(ヴニェ)⁵⁸ が生まれ、権威言説(演説、新聞の論説記事等)、儀礼行為(職場や学校の集会・行事等)が本来の意味からずらして理解されるようになる。この権威的言説のパフォーマティブ・シフトによるずれを、国家は予想、自覚できなかったとする。

モラル言説は、権威的言説と内容が異なるものの、少なくとも、公式メディア、『コムソモール』紙は、共産主義モラルの訓育という合目的性の下、自主性を持つとする読者の共同体的空間を形成しようとしたのである。様々な意見が表明される過程で、自然に意味のずれや理論のねじ曲げが起き、それはどのような社会でも起きるものとして、ある程度前提とされていたとするのが適切だと考えられる。

ただし、1960 年代の新聞における共同体的空間と、ユルチャクが 1970 年代以降のソ連の言説の特徴として指摘した、市民の間の「ヴニェ」とのつながりについては、60 年代後半以降の言説を詳細に検討する必要があるだろう。

6. ソ連における若者言説の広がり

1960 年代、党綱領等のモラルに関する公式の理論と、若者の考え方や言葉の多様化、自由化とのつながりは、おおよそ次のとおりと考えられる。

ソ連共産党が、1961 年、約 20 年後に、ソ連の社会主義は共産主義に移行すると宣言する。その際、党は、マルクス＝レーニン主義に基づき、生産性向上と直結した共産主義モラルを示し、共産主義モラルを党員だけでなく、ソ連人全体に育もうとした。

共産主義モラルは、「共産主義」という看板でありながら、一般的な性格の内容のものであり、そのイデオロギー性は、当該モラルが、搾取や階級が残る資本主義経済社会では本質的なものになり得ず、社会主義、共産主義社会においてのみ真に実現されるとするところにある。

公式理論が、共産主義モラルを、社会の人間関係、日常生活の中から見つけ出し学ぶべきとした

⁵⁶ «Как к воспитательной работе с молодежью привлекаются ветераны революции, гражданской и Отечественной войн, ветераны труда», Моральный кодекс строителя коммунизма, С.181.

⁵⁷ ユルチャク／半谷訳『最後のソ連世代』、137 頁。

⁵⁸ ユルチャク／半谷訳『最後のソ連世代』、178 頁。

ことから、『コムソモール』紙は、読者を取り巻く日常生活に関する投書や取材記事を掲載した。中でも、読者からの相談に基づき、広く応答を呼びかける記事は反響が大きかった。

『コムソモール』紙は、広範囲の読者の関心を惹くため、公式のモラル言説に合致しない言葉を掲載するなど、記事内容の真正性を重視するとともに、様々な視点や意見が尊重される共同体的空間づくりに努めた。共同体的空間のイメージは、職場や学校単位のコムソモールの勉強会にも影響を与え、若者は、それぞれの生活に合った市民モラルを見つけようとした。

編集局は、読者に意見を求める場合は、賛否両論の立場で、議論の視点を示すだけに止め、また、投稿採択の際も賛否の理由も含め意見の多様性を重んじた。公式モラル言説に近い投書だけでなく、はずれる投書、少数派の意見も採択し、また、それらの投書に、編集局は必ずしも一方向的な評価をしなかった。編集局は、読者が、モラルの反転、誤用、悪用、ずれ等を、現実の生活の中で、自分で修正すると見込んだのである。

この過程において、若者の中で、日常生活の諸事象の合理的な解決、改善が第一となる。共産主義モラルにおける全人類的な性格の部分の意味が前景化し、イデオロギー性は目立たなくなる。⁵⁹

意味のずれや、イデオロギー性の背景化は、モラルが社会に広がる過程で自然に起こる。それは、モラルをねじ曲げたり、歪めたりしない善意の者においても同様である。市民が共産主義モラルを行動規範・価値観にするという合目的性の下で、一人ひとりが、モラルと個々の日常における問題点を調整することで、若者の考え方や言葉は多様化し、自由になったのである。編集局が討論の活性化に主眼を置いたことにより、新聞に共同体的空間が生まれ、多様化、自由化した若者の考え方や言葉が掲載されたことは、公式のモラル言説と矛盾せず、むしろ、整合性があると考えられる。

ただし、以上は、公式のモラル言説と『コムソモール』紙の投書に見られる若者言説の広がりとの間に整合性があるということであり、必ずしも、党が一方向的に若者の言説を多様化、自由化したということではない。若者の思考や言葉は、日常生活で既に多様化、自由化しており、『コムソモール』紙が、若者の言説に市民モラルの秩序を与えようと、若者言説を公式言説の場である新聞に引き入れる過程において、新聞に多様な意見や言葉が現れたとも考えられる。

若者たちは、絶え間なく改善すべき問題がある日常の中にいる。問題が解決されなければ闘争は継続し、また、解決されれば、今度はそれまでやむを得ないとされていた行動や性格が問題だと認識され始め、新たな闘争が起こる。人々が日常生活のモラルを率直に語ることで、考えや言葉の多様性、可能性はさらに広がるのである。

(ごとう さとる)

⁵⁹ 共産主義理論において、共産主義が広範囲の人々に拡がれば、それが当たり前になって、共産主義モラルと意識さえされなくなり、そして、やがて国家が消滅し、社会は良心的な住民たちが自治的に運営するようになる。イデオロギー性が目立たなくなることは理論と合致すると考えられる。

<附録> ソ連の若者言説、日常への注目と若者言説の広がり(イメージ)

①	マルクス＝レーニン主義:社会主義➡<発達>➡共産主義
②	ソ連共産党第三党綱領:ソ連は約 20 年後、共産主義に移行 ➡ 目標 経済の発展(労働生産性向上、生活水準向上)&全人類、一般的な内容の共産主義モラルの訓育
③	党、コムソモール:共産主義モラルの理論構築と普及(公式解説書作成) ・市民モラル…職場、学校、家庭等日常生活から学ぶ
④	『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙:若い読者の共産主義モラル訓育を促進 ・職場、学校で日常生活を送る若者の相談、疑問をめぐる投書を掲載。 ・真正性ある投書(日常生活の慣行に着目)、公式モラル言説からはずれる言葉、意味のずれ(共感性の重視)、共同体的空間の創出(多様な意見) ➡ 共産主義モラルの合目的性の下で、より自由な討論が容認(奨励)される。
⑤	否定的事象、絶え間なく改善すべき問題がある日常＝モラルの広がり …問題未解決ならば闘争は継続。解決ならば、別の事象の問題性が認識される。 ➡ 日常を率直に語ることで考え方、言葉は一層多様化、自由化する。

О редактировании писем молодежи в советские газеты в 1960-ые годы:

Анализ развития мысли и речи молодежи на основе материалов газеты «Комсомольская правда»

Сатору ГОТО

В 1961 году была принята Третья Программа КПСС. Программа, на основе теории марксизма-ленинизма, поставила целью построение материально-технической базы коммунизма, а также воспитание у каждого советского человека коммунистической нравственности. Партия считала, что в общественной жизни человек должен обрести коммунистическую мораль. В согласии с этим курсом газета «Комсомольская правда» печатала статьи, связанные с бытовой жизнью ее обычных читателей.

Целью данной работы является анализ статей, содержавших отклики на письма читателей («читательские форумы») по вопросам морали, разбор критериев, по которым редакция отбирала отклики и т. д., и, исходя из этого, объяснить, каким образом мысли и речи молодежи становились разнообразнее и свободнее.

В работе приводятся 3 статьи из «Комсомольской правды» 60-ых годов. В одной из статей были напечатаны письма с разнообразным содержанием, в которых читатели более свободно, чем раньше, высказывают собственное мнение. Там было много высказываний, не совпадавших с официальными идеями партии, с официальной моралью, при этом редакция относилась к словам читателей спокойно, не давая односторонних оценок и комментариев. Поднятые темы постепенно развивались, и статьи редактировались таким образом, чтобы дискуссия пришла к общим результатам. Можно сказать, что редакция и читатели оказывали влияние друг на друга.

В другой статье содержание писем более однонаправленное, большинство напечатанных откликов ближе к официальной риторике. Высказываний, не совпадавших с официальной моралью, мало. Письму, составлявшему исключение, редакция сама дала отрицательную оценку, т.е. влияние редакции было сильнее.

Третья статья содержит множество разнообразных откликов по трем темам. Дебаты читателей по каждой из них были оживленными, но форум не пришел к общему результату. Влияние читателей в данном случае было сильнее.

На основе анализа содержания статей мной выделены три основных черты их редактирования: 1. Редакция ценит откровенность, с которой читатели высказываются

по интересующим их вопросам, 2. Мысли, высказываемые в письмах читателей, порой сознательно или несознательно противоречат официальным моральным установкам, 3. В газете образовалось сообщество, где читатели высказывают свои мнения независимо от официальной идеологии. Редакция уважала разнообразие содержания откликов. Такие же явления наблюдаются и в странах Запада.

В процессе воспитания гражданской морали, обсуждения бытовой жизни общества молодежь могла высказываться о негативных явлениях, свободно и своими словами выражать личное мнение, а также развивать собственные мысли, отстаивать свои моральные принципы.

Подобные процессы в рассматриваемые годы видны как в Советском Союзе, так и на Западе. Они проходили не только в личной, но и в общественной сфере, в частности в официальной прессе, которая стала активно поднимать вопросы быта граждан.